いだてん
韋駄天の記

劇作家 岡部耕大 ⑫

演劇は芸術か否か

A・ウェスカー氏とわたしはちょっとした議論になった。「演劇は芸術か否か」である。わたしは「芸術とは、一人でやる陶芸家とか絵描きをいうのであって、寄ってたかって創る演劇は芸術とはいわない」といった。A・ウェスカー氏がいう芸術の意味は違っていたみたいで、後に「わたしの通訳がまずかったのです」と通訳の人が謝ってきた。わたしも若気の至りであった。

早朝、宿屋のわたしの部屋をノックする人がいる。水上勉氏であった。氏は「耕大、俺の部屋に来い」とうむをいわさずいった。坊さんの口調であった。年寄りは朝が早い。わたしは水上勉氏の生い立ちを知っていた。氏の部屋を訪ねると、硯石に墨が磨ってあった。墨黒々である。水上勉氏はさらっと書を書いた。「葉も落ち　実も落ち　根に帰る」。この書は掛け軸にして書斎隣の和室の床の間にいまでも飾ってある。「ついでといってはなんですが」。ついでに表札も書いてもらった。表札の脇面には一九八二年水上勉とある。

わたしは昔、世田谷の笹塚に住んでいたことがある。近所に内田吐夢監督の家があった。地味で瀟洒な日本家屋で、いかにも内田吐夢らしかった。水上勉氏の家は知らない。あの人のファンである。あの声と男という男を当惑する魅力的な表情。若狭で、セーラー服の若尾文子さんと佐久間良子さんが手をつないで歩いているのなら、どうすればいいのか。困っちゃうなあである。あっ、和子姉さんも入れて3人がいいか。「犯風貌や佇まいには家を感じなかった。わたしは、氏の故郷若狭を知らない。ほんとに、氏の映画「越後つついし親不知」に主演した若尾文子のような人が歩いているのだろうか。

若尾文子さんは少年時代に見た映画「十代の性典」から、ずっと人は、この3人の中にいる」のナレーションが流れる。そんな想像をしたりする。3人とも犯人だったりしてな。

時折、俳優やプロデューサーから晩餐会に誘われる。それなりの格好をして招きに応じる。あまり、ラフな格好でもいけないし、ネクタイや改まった格好でも具合が悪い。難しい。銀座ならばレストラン、六本木なら寿司屋か蕎麦屋である。いずれも名の知れた店である。せっかくのご馳走も緊張気味で食欲がなくなり、酒ばかり飲んでいる。仲居さんからは「お口に合いませんか」と嫌みをいわれたりする。

まだ偉くなるまえの若手の政治家とご一緒したこともあるが、健啖家であった。4、5人のボディーガードを立たせたまま、次々と皿に盛られた中華料理をたいらげた。「政治家は飯を食うのも仕事のひとつ」と教わったことがあったが、なるほどとうなずけた。いまの安倍晋三首相である。（松浦市出身）